



Title	堀口捨己とオランダの建築
Author(s)	足立, 裕司
Citation	デザイン理論. 1997, 36, p. 43-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

堀口捨己とオランダの建築

足 立 裕 司

神戸大学

キーワード

堀口捨己, 『現代オランダ建築』, アムステルダム派, J. J. P. オウト, 非都市的なもの, 民家

Sutemi Horiguchi, "Contemporary Dutch Architecture"

J. J. P. Oud, Non-Urban Architecture, MINKA

はじめに

1. オランダ訪問時の状況
2. 著作にみられる傾向
3. オウトへの傾倒
4. アムステルダム派への注目
5. パーク・メールウクへの眼差 — 伝統の継承
おわりに

はじめに

1922年, 堀口捨己は建築研究のためにヨーロッパに向かう。その途上のオランダの建築との感動的な出会いを記した著書が『現代オランダ建築』¹⁾ (図-1, 以下文末の図版説明参照) である。出版されたのは大正13年末 (1924), 帰国後1年に満たない間の煥発を入れない発表であった。出版されるやいなや, 日本でそれまであまり知られていなかったオランダ建築への関心を一挙に高めたといわれている。また, 堀口捨己自身にとっても初めての著書として, その後の小出収邸, 紫煙荘等への関連が指摘されている²⁾。

しかし, この著書の与えた影響に比べると, その内容についての吟味はあまりなされてきたとは言

い難い。彼の活発な言論活動にあって, 自身の建築観を直接披露したものではないことから, オランダの建築に込められた彼の建築観について, あまり注意をひかなかったためと考えられ

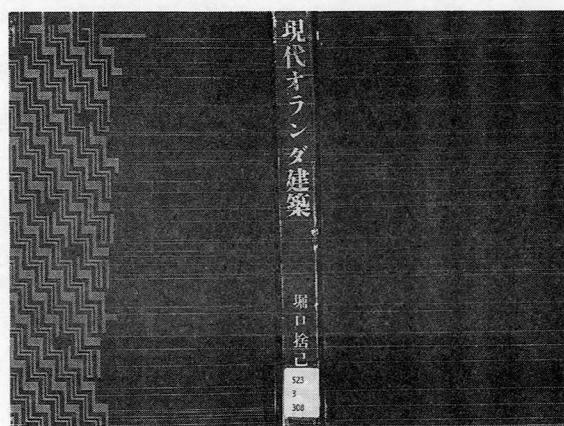


図1

る。本稿は、堀口捨己が見たオランダの建築を実際に辿ることにより、この著書に反映された彼の建築観とその後の建築作品との関連を考察することを目的としている。

1. オランダ訪問時の状況

堀口捨己がオランダを訪れたのは、その著書から1923年9月30日からの8日間と「それから半年余を経て」の2度である。1924年1月末には帰国しているので、時間的には齟齬がみられるが、一連の旅行のなかでのことと考えられる。旅行した場所は佐々木宏氏の著作に詳しいので反復は避けるが³⁾、彼の関心は当初ウィーンのゼツェッショントン運動やワイマールのバウハウスなどに向けられていたようである。オランダの現代建築はまったく予期しない出会いであったことが内容から読み取れる。

1920年代前半のオランダ建築は、世界的にみても最も高揚した時期にあったが、彼とオランダ建築との出会いを決定的にしたのは、むしろ都市近郊の田園的な美しさや人情であったと記されている。加えて、他国に比べ活発に行われていた都市の建設活動を見るにつけ、他にはない魅力をこの国の建築に見い出したと思われる。

ただ、この著作の発行ということに限るなら、もし多少とも時間が前後していたなら、この書はもっと違った内容になっていたかもしれない。あるいは、旅行途上で関東大震災の報が無く、急いで帰る必要がなければ、彼の関心は旅の後半に出会ったバウハウスやJ. J. P. アウトに集中したことだろう。やや、中途半端な帰国という事態のなかで、旅の前半を鮮明に印象付けたオランダが選ばれることになったと考えられる⁴⁾。

こうした微妙な邂逅の様を、筆者は既に武田五一という建築家とアール・ヌーヴォーの間に見てきたが、ここでは堀口捨己という次世代を担う建築家の眼に、アール・ヌーヴォーからモダニズムへと再び大きく変転するヨーロッパの建築の状況がどのように映ったかを検討してみたい。この時代の内外の関連する動向を拾うと次のようになる。

1921年 緑草会『民家図集』(日本における最初の民家研究図集)

1922年 シカゴ・トリビューン社設計競技

ミース [鉄とガラスの摩天楼計画]

平和記念東京博覧会における分離派の活躍

今和次郎『日本の民家』(民家に関する最初の一般書)

石原憲治の『日本農民建築』(")

1923年 バウハウス [美術と技術の総合] 展開催

A. ペレ [ル・ランシーのノートルダム教会]

F. L. ライト [帝国ホテル]

創字社結成

関東大震災

1924年 バウハウス、ワイマール校閉鎖

F. ヘーガー [チリ・ハウス]

P. ベーレンス [ヘキスト染色工場]

E. メンデルゾーン [アインシュタイン塔]

リートフェルト [シュレーダー邸] (図-2)

J. J. P. アウト [カフェ・ド・ユニ] (図-3)

J. J. P. アウト [ホーク・ホラント集合住宅]

財団法人同潤会設立 [都市集合住宅の建設活動]

1925年 ル・コルビュジエ [エスプリ・ヌーヴォー館]

わずかにこれだけの事項を選んでも、表現主義の全盛振りと、いま一つの傾向としてのモダニズムが地歩を固めつつある時期であったことが見て取れる。日本では、民家に関する研究がようやく出始めるころであり、関東大震災以降、同潤会による都市集合住宅の建設や住宅の基礎研究が始まるころであることも注目される。

建築思潮としては、オランダでも同様の傾向にあるが、住宅建設では世界に先駆けた活動がみられ、また、オランダ機能主義(図-4)とよばれる若い世代が活動し始めるまでには、まだ多少時間が必要である⁹。もう一つ、日本と同様にライトの影響(図-5)が強い国であったことは特筆される。

こうした動向を短絡的に捉えるなら、分離派建築運動で表現主義的な傾向を強めていた堀口捨己だけに、ドイツの表現主義に一層傾倒したとしても不思議ではなかったと思われる。しかし、表現派への関心はE. メンデルゾーンに代表されるくらいであり、B. タウトやH. ペルチヒにも極めて冷やかである¹⁰。それに反して意外なことは、既に活動を終えつつあったはずのウィーン分離派に大きな関心を寄せていることである。そのひとつの現れが、ダルムシュタットやJ. ホフマンのストックレー邸を見た感激であろう。

ウィーン分離派から先端のバウハウスへと向かうことは、一般的な建築思潮に同調しているともみられるが、同じように表現的な傾向をもつドイツとオランダに何故これほど大きな関心の差を生んだのか、堀口捨己の建築観を知る上では、ひとつの重要な視点となるだろう。

ところで、アムステルダム派のモダニズムへの転向という変化も、オランダ国内において期せずして起こっていた。この時代のオランダは、アムステルダム派の活動がデ・クラークの死

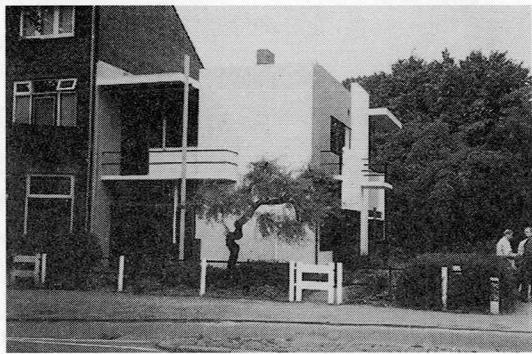


図 2

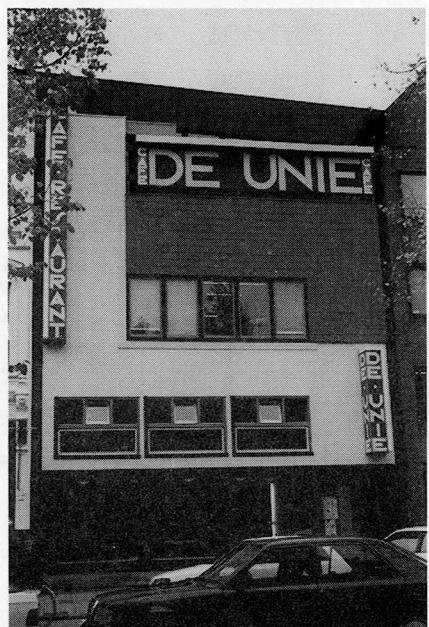


図 3



図 4

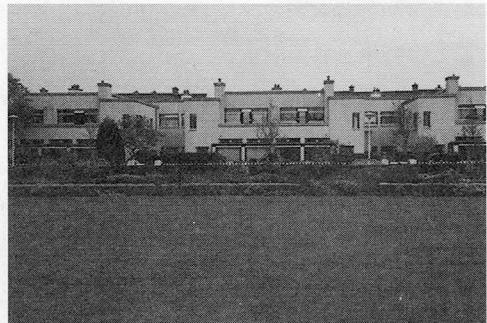


図 5

(1923年)により中心を失い、それ以上にアムステルダム派の理論的な中核であった W. Th. Wijdeveld (ワイドフェルト) が雑誌『Wendingen (ウェンディンヘン)』の編集から退くことで大きな転換期を迎えていたからである⁷⁾。彼の訪問がもう数年遅ければ、アムステルダム派の中心は、J. F. Staal (スタール) らの若い世代に移り、モダニズムへと傾斜していくことになるため、違った様相として映じたかもしれない。さらに、日本では帝国ホテルで火がつくかにみえるライト風の造形はここでは下火になりつつあり、De Stijl (デ・スタイル) の建築的な造形を担う G. Th. Rietveld (リートフェルト) は代表作のシュレーダー邸で未だデビューを果たしていなかったことも付け加えておく必要があるだろう⁸⁾。

2. 著作にみられる傾向

『現代オランダ建築』は巻頭に堀口捨己自身も書き記しているように、正確なオランダの建築界の紹介を目的としたものではない。しかし、オランダの近代建築の歩みから、その独自性、特に1923年前後の個々の動向をよく伝えていることも事実である。確かに、選ばれた作品全てが歴史に残っているものではなく、今となっては現地の歴史的建造物の担当者でさえ分からぬるものも含まれるが、ほとんどが現存しており(表-1※印)、今も利用されていることを

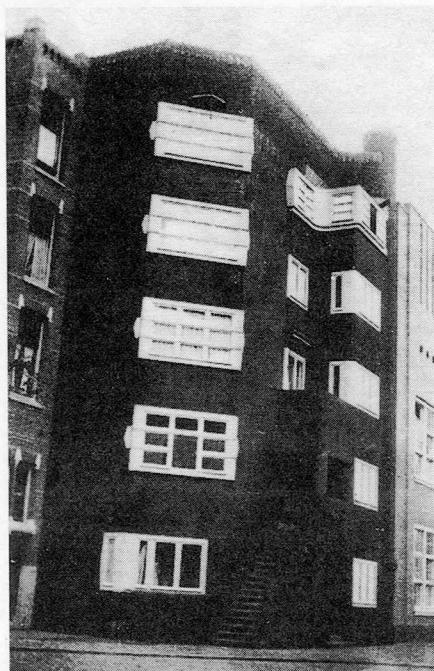


図6 堀口捨己の図版39



図7 1996年の撮影による同所

表-1『現代オランダ建築』所収図版一覧

図版	範囲	建物・図版名称（日本語名称は括り捨已の使用したもの）	都市名	建築家名	建設年・初出雑誌	写真出典・備考	※：確認済
1	都・近	アペルドルン近くの無線電信所のRC彫刻（Radiostation）	Apeldoorn	H. A. van den Eijnde	Wend'1923-11/12, WTA		※
2	都・近	デルフトの土木協会の細部彫刻	Delft	Th. van Reijn			不明
3	都・近	ロッテルダム市庁舎の時計台大理石彫刻	Rotterdam	Hildo Krop			不明
4, 5	都・近	アムステルダム船舶業者の事務所（Scheepvaarthuis）	Amsterdam	J. m. van der Mey	1912-16/1928) Lit79-10	保存状況良好	※
6	田・伝	ベルヘンの住家（パーク・メールウク Park Meerwijk 敷地内 Huize de Bark	Bergen	J. F. Staal	No. II, IIa, 1915-18, No. I, 1915-18	○ WEND1918.8	保存状況良好
7		Huize de Ark+Tuinhuisje Villa De Ark		J. F. Staal	No. IV, 1915-18		改築顕著
8		Huize Beek en Bosch		G. I. Blaauw	No. VII, 1915-18	WEND1918.8	保存状況良好
9, 10		Huize de Beukenhoek		Margaret Kropholler	No. X, X I, 1915-18	WEND1918.8	内外の変更顕著
11		Drie huizen onder een kap		J. F. Staal	No. XIV, 1915-18	E. H.	外部改修・変更
12		Huize Meerhoek		G. I. Blaauw	No. X-III~IV, 1915-18	WEND1918.8	保存状況良好
13, 14		Drie huizen onder een kap		P. L. Kramer	No. XVII, 1915-18	○ WEND1918.8	掘口訪問時は焼失
15		Tuinhuus-nu De Hut		P. L. Kramer			保存状況良好
16	田・伝	ベルヘンのパーク・メールウク外の住家	Bergen	不明		○	所在不明
17		ベルヘンのパーク・メールウク外の住家		不明		○	所在不明
18	都・近	アムステルダム南郊の集合住宅 Stedebouw, Amsterdam-Zuid	Amsterdam	H. P. Berlage	1900-07, 1915-17		
19~21		全体計画		M. De Klerk	1921-22,		サッシ変更
22		Vrijheidslaan/Kromme			1900-07, 1915-17,		一部改変
23, 24		Holendrechtstraat1-47		M. Staal + Kropholler	1921-22		サッシ変更
25				J. Rutgers			サッシ変更
26				H. Ph. Wijdeveld,			サッシ変更
27		Vrijheidslaan		M. De Klerk??	1921-22		※
28~31	都・近	アムステルダムの集合住宅	Amsterdam	M. De Klerk,	1913-20	NNB56.55.58	※
32		Woningbouw 'Eigen Haard'					一部改変有
		付属郵便局内部 'Eigen Haard', Post Kantor					※
33	都・近	アムステルダムの集合住宅	Amsterdam	M. De Klerk	1913-20		番地番号変更
34		Spaarndammerplantsoen		M. De Klerk	1915-16		※
36~38		Woningbouw 'Tweede blok'		M. De Klerk + P. L. Kramer	1919-22	○	※
39		Woningbouw 'De Dageraad'		P. L. Kramer	1921	○	保存状況良好
40~42	都・伝	ワハニンヘンの高等農学校、研究所	Wageningen	C. J. Blaauw	1919-22 Wand 1 923-11/12, Lit 154s	NNB5.7.8	※
		Microbiologie; Plantenfysiologie					※
43, 44	田・伝	ワセナールの住家「ペダステール」('De Paddestoel')	Wassenaar	G. I. Blaauw,		43図は○, 44:NNB97	所在不明
45, 46	都・近	アムステルダム市博物館内臨時展覧会場装飾	Amsterdam	H. Ph. Wijdeveld			—
47, 48	都・近	国民劇場設計図	Amsterdam	H. Ph. Wijdeveld	1921	NNB111, 138, 139	—
49	田・伝	ブッシュの住家	Busum	H. Ph. Wijdeveld			※
50	都・伝	アムステルダムの船舶仲買人の事務所	Amsterdam	La Croix	1919	NNB27	不明
51	都・近	ベルリンにおける住家設計図	Berlin	J. J. P. Oud	1922	NNB93	—
52	田・近	ノルドウクの住宅内部 ('Vakantiehuis 'De Vonk')	Noordwijk	Oud + Th. van Doesburg	1917-18,	D. S1918. 1	用途変更
53	都・近	ロッテルダム市営住宅現場監督小屋 "Oud-Mthenesse"	Rotterdam	J. J. P. Oud	1923		復元再築
54	都・近	集合住宅計画図 (Strandboulevard apartments)	—	J. J. P. Oud	1917, 1 DeStijl1	D. S1917. 1	—
55	都・近	スラヌエバーへの写真屋のアトリエ内部	Den Hag	J. Wils		NNB110	所在不明
56	都・近	ロッテルダムの集合住宅 (Woningbouw)	Rotterdam	M. Brinkman	1919-22	○	外装変更
57	都・近	ヒルベルシュムの電気排水機小屋	Hilversum	W. M. Dudok + J. H. Meijer	1920	NNB86	修理中
58	都・近	ヒルベルシュムの共同浴場 (Centrum van Fysiotherapie)	Hilversum	W. M. Dudok	1920	NNB35	用途変更
59, 60	都・近	ヒルベルシュムの小学校 (Bavinksschool)	Hilversum	W. M. Dudok	1921, BW1924	NNB39, 122	※
61~63	都・近	スラヌエバーへのヴィラ・セベスティン (Sevensteijn)	Den Haag	W. M. Dudok + H. Wouda	192021	NNB32.33, 121	※
64~66	都・近	ウトレヒトの学校	Utrecht	W. A. Maas + L. J. K. Zonneveld		NNB80.81.82	住宅に改装
67	田・伝	ヒルベルシュムの住家 キア・オラ (Kia Ora)	Hilversum	Van Laren		NNB74	所在不明
68	田・伝	ヒルベルシュムの住家	Hilversum	Van Laren		平面図はNNB	外装変更
69	田・伝	ヒルベルシュムの少年軍のクラブ (Padvinders Clubgebouw)	Hilversum	Van Laren	1921	NNB69	敷地ラーレンは間違い
70	田・伝	ヒルベルシュムの住家	Hilversum	J. C. van Epen			所在不明
71	都・近	ヒルベルシュムの薬局エマ (Emma)	Hilversum	H. F. symons		NNB100	※
72	田・伝	ブライキュムの住家 (草履根の画家の家)	Blaricum	H. F. symons		W.D1918.3	所在不明
73, 74	田・伝	オペルベーンの住家	Overveen	H. F. symons			所在不明
75, 76	田・伝	ワセナールの住家ヒーグステーデ (Hiegestede)	Wassenaar	J. J. Brandes		○	修理中
77~79	田・伝	ワセナールの住家デ・ショウエンヘーク (Schouwenhoek)	Wassenaar	J. J. Brandes		NNB15.16, 図79は○	修理中
80	田・伝	ワセナールの住家レコティヌ (Lecotine)	Wassenaar	J. J. Brandes			所在不明
81~83	田・伝	オーストヴォルヌの住家 (Het Reigersnest)	Oostvoorne	P. Vorkink + Jac. Ph. Wormser	1918-21	NNB101.102.136	内部変更有
84	田・伝	アルクマールのある家の室内	Aalkmaar	ペイベート + J. Duiker			所在不明
85, 86	田・伝	ヴェルゼンの住家	Velsen-Noord	Ch. Bartels		NNB1.2	所在不明

表中凡例 田：田園的 都：都市的 近：近代的 伝：伝統的略 勝：Wendingen De Stijl NNB：Nieuw Nederlandsche Bouwkunst E. H.：Expressionismus in Holland

考えるとき、彼のオランダへの注目は時代を越えた意味を有しているともいえる⁹⁾。

内容は写真56件、84枚と図版及びオランダの建築に関する論考からなる。写真の選択は最新のものに限定されており、必ずしも記述に沿ったものではない。例えば、H. P. Berlage（ベルラーへ）の理論にかなり言及しながらも写真は省略しているところに、思潮や理論を重視しながらも制作に現代性を求めようとする傾向を見ることができる。

彼の著作に掲載された写真を整理すると表-1のようになる。雑誌の『ウェンディンヘン』や『デ・スタイル』は当然のこととして、参考書の第一に挙げられるものが『Nieuwe Nederlandsche Bouwkunst』¹⁰⁾である。著作中にも参考図書として記されているものであるが、この本だけに限っても、約30%にも及ぶ写真が流用されている。おそらく、アオリの効いた写真の多くはこうした既存の図版を用いたものと思われる。逆に、自ら撮った可能性が多少ともある写真を選ぶと表中の○印を付けたものが相当すると思われるが（図-6、7）、かなり限定されることが見て取れるだろう。自前の写真が少ない理由は折角撮った写真を紛失したためであるが¹¹⁾、これに文中の記述から訪れたことが確認される建物を加えてもアムステルダム等大都市郊外の建物はそれほど増えない。つまり、この事故に關係なく、彼の視点はこの書のなかに明確に示されていると考えられる。

こうして内容をつぶさに見ていくなら、たとえそれほど大きな国ではないといっても、2度の訪問だけでこれほどまでに理解を深めることに感心させられる。おそらく、ここまで理解を可能にした背景には、参考図書についての的確な示唆やオランダの建築界の概要を教える人があったからと思われる。その役割を果たした第一の人物が、文中にもでてくるワイドフェルトであったろうと思われる。彼は建築家として活躍する一方で、雑誌ウェンディンヘンの編集者として造形活動全般に対する深い理解をもった人物であった。この時期の雑誌が単なる同人誌の域を越えた多彩な内容を有していたのも彼の能力と幅広い関心に負うところが大きい。〔Park Meerwijk（パーク・メールウク）〕のような不便な場所に建つ建物を、一介の旅行者が見に行くことは通常ではあまり考えられず、ワイドフェルトの影響を抜きにしては理解しにくい。しかも、後で触れるが、この場所を抜きにしてはオランダの建築を紹介する気になったろうかと思われるほど、この書のなかでは重要な意味を持っていることは指摘しておく必要があるだろう。

ただ、W. M. Dudok（デュドック）はともかくとして、アウトやデ・スタイルに関する知識はワイドフェルトから聞けなかったようである。アウトについては、文中でも最も理論的に感銘を受けた一人として記しておきながら、当初は「ライト氏の亜流」¹²⁾くらいにしか思っていなかったことを後に述懐している。ドイツでモホリ・ナギなどから啓発されることによりアウトを再認識し、再びオランダに戻る契機となったことは、当時の思潮の分布を知る上でも興

味深い事実である。確かに、当時のアウトはドイツのモダニズムの建築家たちに非常に高く評価されており、そうした副次的な関係から、まだ新しい傾向の作品が少なかったアウトを見い出したと考えられる。

3. アウトへの傾倒

『現代オランダ建築』で取り上げたアウトの作品は Van Doesburg (ドースブルフ) との合作の〔ノルドウクの住家 (Vakantiehuis 'De Vonk')〕(図-8, 9) と〔ロッテルダムの市営住宅現場監督小屋 (Mathenesse Siedlung)〕(図-10) だけであり、他は『デ・スタイル』に掲載された構想案のみである。アムステルダム派の豊穣な実績に比べ何とも質実な成果である。しかし、こうした選択には、彼の極めて明快な選択基準が込められていることを見過ごしてはならない。それは掲載された作品が全体を示さず、内部や建物の一部を取り上げているに過ぎないからである。

ノルドウクの住家もロッテルダムの市営住宅 (図-11) も、伝統的な煉瓦造で屋根のかかった外観を有しているが、その部分は除外されている。屋根のない造形としては〔ツァツェンダライケン集合住宅〕(1920) が該当しており、掲載されてもいいと思うのだが、これも何故か掲載されていない。レンガ造のため、ライトのラーキンビルのような印象を受けたためであろうか。

彼は写真を選択することにより、こうした伝統的な枠を抜けきらないアウトを避け、来るべきアウトの姿を予期したのである。この数年後、アウトの代表作ともいべき作品が続々と発表されていくことになる。〔カフェ・ド・ユニ (1925)〕、〔キーフホークの集合住宅 (1929-30)〕など、日本におけるアウトの評価を固めたものである。

ところで、堀口捨己のアウトの紹介のなかで興味深いのは、アウトの最も初期作品として注目される〔Villa 'Allegonda'〕(1917, 図-12) がなぜか取り上げられていないことである。アウトの作品中でも、後の作風を感じさせるものであるが、理由として考えられるのは、作品がやや古いということと、彼がこの『現代オランダ建築』の編集に当たって、多くの図版を取り込んだ『Nieuwe Nederlandsche Bouwkunst』のキャプションが偶然間違っていたため、アウトの作品として見ていなかったためと思われる¹³⁾。

アウトの理論をかなり短期間に咀嚼しながら、屋根のある造形、煉瓦積みの構造を避け、陸屋根、フラットな表面、横長窓といった形態面でのこだわりがみられることは、理論軽視の姿勢とみられなくもない。しかし、アウトの建築理論についてまだ何も知らない日本の建築界には、彼の初期作品とアムステルダム派との違いが理解できるはずもなく、やむなくとられた配慮ではないだろうか。また、多少ともライトの影響がみられるものも避けることによって、両

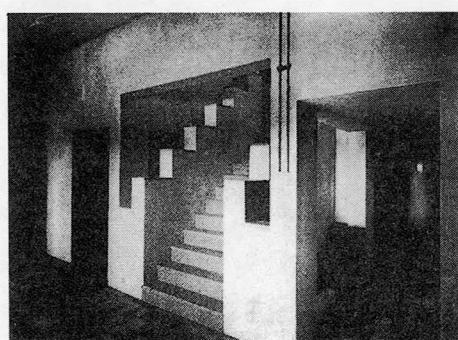


図8

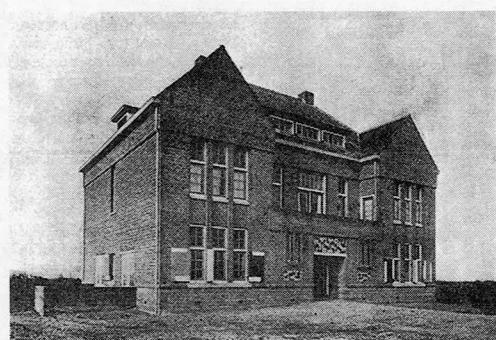


図9

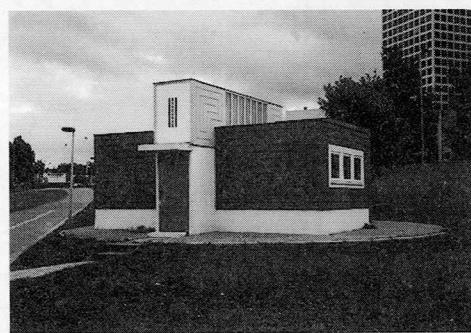


図10

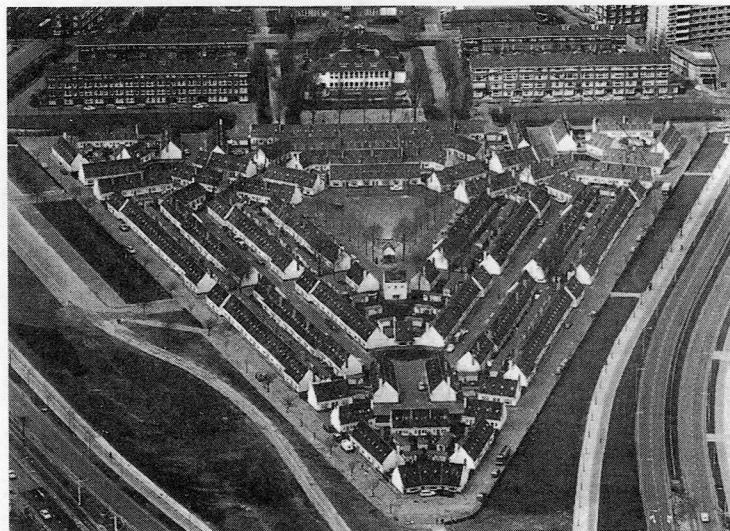


図11

者の異なる姿勢を明示する意図があったみることができる。

作品としてこれほど劣勢であったロッテルダムのグループであったが、かといって堀口捨己の選択の基準は緩められてはいない。『デ・スタイル』のメンバーといっても作品に大きな相違があることから、例えばライト風の作風で実績を上げていたJ. Wils（ウィルス）の作品を避けていることにも窺える¹⁴⁾。ウィルスは堀口捨己の訪問時、既にライトの影響の強い作品を多く手がけており、日本人建築家の関心をひくものであったと思われる。しかし、こうした安直な方向を敢えて避けていることにも堀口の明確な意志の表れをみることができる。

おそらく、アウトに準ずる建築家は唯一デュドックであったろう。ここでも注意しなければならないのは、堀口捨己の訪れた時期には彼の名声は日本に届いておらず、まだ〔浴場〕(図-13)や〔小学校〕(図-14)といった小品のみを手掛けているにすぎなかった。後に彼を一躍有名にする〔市庁舎〕は建設途上であったが、彼の実直で中庸を得た作風を高く称賛していることからも、堀口捨己の先見性をみてとることができる。

4. アムステルダム派への注目

このように見ていくなら、この書のテーマとなっているのは、やはりアムステルダム派の近作である。ドイツでバウハウスの活動に接して以来、堀口捨己のアムステルダム派への関心は急速に低下しつつあったとみられるが¹⁵⁾、著書としての内容を高めているのがアムステルダム派であることも事実である。

その選択した内容を検討していくと、多様な印象の中にもある種の取捨選択が働いていることが分かる。そこに彼の建築に対する価値基準をみいだすことができそうである。そのことは、この書の直ぐ後に出版された『和蘭の近代建築』(上下2巻、1926)と比べてみるだけでも容易に理解される。比較してみると、多少とも『和蘭の近代建築』の方が出版が後だけにモダニズムに沿った傾向を多く含んでいる。しかし、同時に歴史様式を残存させるような対称性の強い作品も含んでいることが指摘され、田園住宅の扱いが前者に比して少なく、大作重視の姿勢が目立っている。

堀口捨己のアムステルダム派の作品紹介は立地によって分類しているが、彼らの作品は都市的な問題に正面から取り組んだ集合住宅と都市郊外に建つ田園住宅との際立った対照性を有している。彼は、社会問題としての住宅建設の重要性を「ドイツの建築の表現の方向が常にデンクマール的」であるとし、対してオランダの建築界が「住宅や貧民長屋や田園都市に向いている」(p. 131)ことに注目する。そして、「アムステルダムのクラーク氏のあの貧民長屋がどこに宮殿の美しさよりその美しさにおいて劣っていると言われましょうか」(p. 133)と評価している。



図12



図13

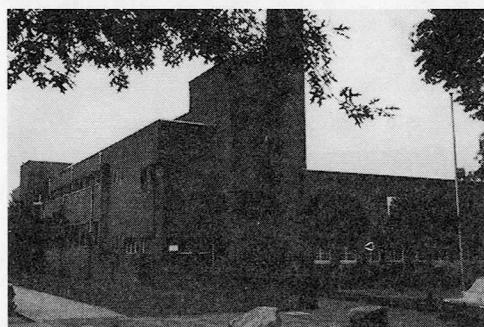


図14



図15

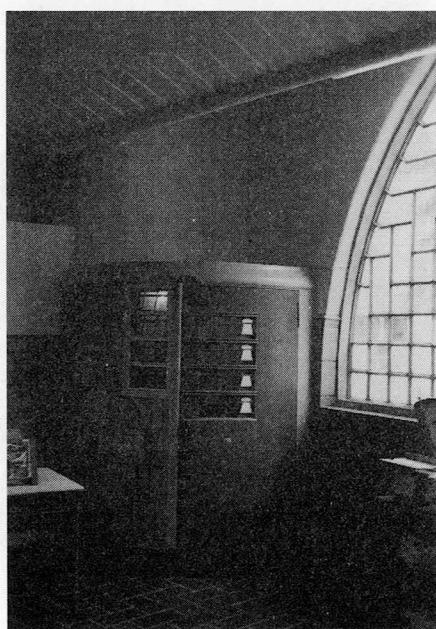


図16



図17

しかし、これほど、アムステルダム派の社会的使命を高く評価しながら、彼の作品の系譜のなかでは、こうした集合住宅への展開は見られない。アムステルダム派の都市住宅建設への評価は、むしろ抽象化され、都市的なものの性質、近代的なものの属性の検討として展開し、彼の住宅作品のなかに結実していくことになったと思われる。社会的な活動へと傾く後の世代とは異なり、個としての充実をあくまでも追求しようとする分離派の性格の一端がこうしたところにも窺える。

堀口捨己は後の『紫烟荘図集』¹⁵⁾に寄せた「建築の非都市的なものについて」と題する論考において、建物を「都市的なもの」と「非都市的なもの」に区分しつつ、都市的な現象を止むを得ないものとしながらも、後者の意味について語っている。こうした区分は、明らかにオランダの建築の見聞と思索を発展させたものであり、洋の東西を問わず共通に直面する近代特有の問題として日本に適用したと考えられる。

彼のこのような反権威的、合理的志向は、明らかにドイツの自意識過剰な傾向——そこにはヴィルヘルム二世時代の記念的建築だけでなく、表現主義の作品も含めてもいいと思われるが——と一線を画することになる。先に述べたように、同じように表現的傾向を有するドイツ表現派の作品より、オランダの建築を評価する理由もこうしたところに求められる。例えば、デ・クラークの作品の中でも〔エイヘンハートの集合住宅〕(図-15, 16)よりも〔アムステルダム南郊の集合住宅(Amsterdam Zuid)〕(図-17)を彼の傑作として評価するのも、表現性、恣意性よりも秩序、合理性を求めていたためである。

5. パーク・メールウクへの眼差し—伝統の継承

堀口捨己がオランダで見いだした最大の対象は、何といっても田園に点在する茅葺きの住宅であった。著書の中で最初に取り上げたのも、パーク・メールウク（図-18）であり、我々がこの時代のオランダの建築として想起する〔エイヘンハートの集合住宅〕や〔ダヘラートの集合住宅〕などの都市住宅からは抜け落ちている視線である。

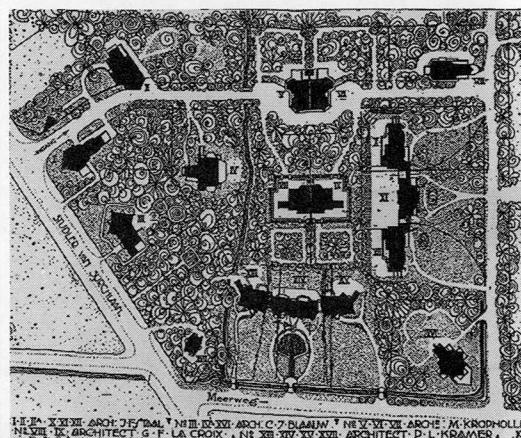


図18

この小住宅群は、アムステルダムの西北にあるベルヘンの自然豊かな林のなかに位置する。アムステルダム派の建築家たちのコ

ロニー、芸術家村ともいべきものである。持ち主は変わっても、今も環境は当時と比べさほど変化しておらず、ここを訪れた堀口捨己の感動が伝わってくる（図-19）。おそらく、分離派建築会の時代から抱いていたロマン的志向をそのまま体現するものと映ったようである。それは、これらの建物について述べる彼の言葉の端々に現れており、

り、例えば「近代の心と魂の醇化から表れて来る空間を持つ立体的な幻想が一つの家にまで持ち越されたようではありませんか。」（p. 141）といった文言にも窺うことができる。

パーク・メールウクのなかで、堀口捨己が特に評価している作品に M. クロポラー（M. Kropholler）の〔掬林の片隅の家（Vila Beukenhoek）〕（図-20）がある。残念ながら、この住宅は改造が激しく、当初の形を想像するのは難しいが、この住宅について彼は「繊細な注意の中に柔らかく張切った容積の均衡、力の調和、には言うに言われぬ女性の美が出ているように思います」（p. 143）と評価する。建築形態を素材の対比、ボリュームの均衡として捉えるところなどに彼の形態へのアプローチの様が表れていることで注目される一節である。

もう一つ、注意しなければならないのは、パーク・メールウクや他の田園住宅にあっても「部分的な奇に失したやり方」は排除され、ある種の規則性、表現的な恣意が抑制されたものを求めていることである（図-21, 22と23, 24）。しかも、ただ伝統的な表現を引き継いだだけのものも否定されており、このことは彼の作品においても、単なる「民家」ではなく、その精神を汲みつつ昇華された茶室、数寄屋に関心を寄せていることに整合しているといえる。

彼は、こうした「草葺」の田園住宅を「百姓の家から暗示を受けている」と認めながら、『燐爛たる華美的官能的蠱惑から、「さび」、「わび」の世界に徹しようとする茶室の閑雅幽玄の致にいたる』（p. 145）日本の数寄屋の歴史を念頭におきつつ、「近代になって初めてこの草の屋根が表ってきたことに特殊な懐かしい興味」（p. 146）を抱いたと述べている。

こうした視点は、やはり「建築の非都市的なものについて」という論考で、より自覚的な展開をみせる。近代という時代が持つべき建物の性質を措定しながら、なお非都市的なものが有する価値にこだわり、遂には近代的なもの、都市的なものの欠落を探り当てることになる。また、逆に真に近代的な性質と茶室の本質が、「機能と表現との一元的な完成」を目指しているとも指摘する。こうした観点はアウトの理論とアムステルダム派の田園住宅を統合し、日本に適用したとも考えられ、後の R C 造の作品群を理解する上で重要な意味を有していると思われ



図19



図20

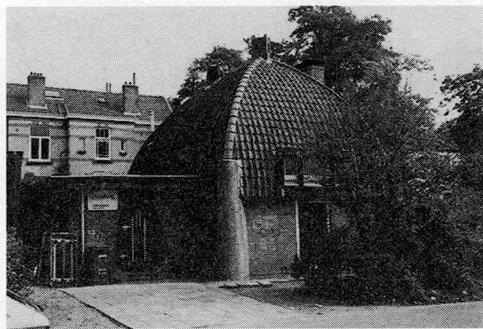


図21



図22



図23

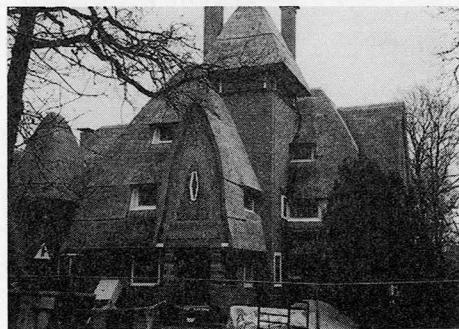


図24



図25

る。

おわりに

以上のように、オランダの建築を通じて堀口捨己の思索を辿るとき、その後の彼の理念の機軸ともいるべき問題が既に提起されているように思われる。それは、1) 国家的な建築課題に対する、住宅という個の課題への傾倒であり、2) 近代化の必然の過程としてモダニズムを絶

対視するのではなく、「非都市的なもの」を対比させることで、相対化、補完しようとする契機をみいだしていること。3) 無自覚な伝統の継承を避け、自覚的に民家をとらえようとしていることで、伝統との創造的な共存、さらなる展開を図ろうとしていること¹⁶⁾、などである。

ただ、オランダでみられたような都市の問題を対象化し、取り組むことは一建築家の立場を越えていると感じられたと思われる。彼は、その問題を非都市的なものを対置することによって、都市に欠けているもの、都市的建築に欠如しているものを浮かび上がらせようとしたと考えられる。

その意味では、彼の戦前の作品を特色付けるコンクリートの住宅はその和解、調停を目指したものと考えられる。都市にあるため、非都市的な材料が使えず、近代的で「普遍的」な材料を用いる時、建物単体としてのデザインの限界が浮かび上がってくる。解決の一つは庭に求められることになる。横山正氏が鋭く指摘したように、「庭もまた都市にあっての存在」¹⁷⁾という堀口捨己の作品がもつ明確な庭の位置付けはここに求められる。

逆に、近代的な住宅を庭によって都市から隔絶させることは、都市的建築としての近代建築の性格を弱めることにもなる。大きな庭にモダニズムの建物を配することは、この当時の住宅に往々にしてみられる傾向ではあるが、日本における近代建築の移入の特色として看過できない曖昧さを残していることも事実として認める必要があろう。

既にみてきたように、堀口捨己自身は都市や近代の課題を回避した訳ではなく、事実、わずかだか都市的な課題を追求した住宅も残している¹⁸⁾。しかし、日本の都市的建築に何らみるべきものが多く、唯一「非都市的なもの」にのみ優れた遺産があると考えていた堀口捨己にとって、両者の調停にこそ日本のモダニズムの有り様が求められると結論するに至ったことは、むしろ自然な成り行きであったと思われる。

注

- 1) 堀口捨己『現代オランダ建築』岩波書店、大正13年12月刊、後に鹿島出版会から『堀口捨己博士著作集』の一巻『建築論叢』に所収されている。本文中の引用は、特に断らないかぎりは後ろにページを記すことで略した。ページは参照しやすいため鹿島出版会版に準拠した。
- 2) 参考文献としては以下の論説を参考とした。
 - ・堀 勇良、近江栄『日本の建築〔明治大正昭和〕・日本のモダニズム』1981年
 - ・S D 編集部編『現代の建築家・堀口捨己』1983年
 - ・建築文化別冊『堀口捨己の〔日本〕』1993年8月
- 3) 佐々木宏『近代建築の目撃者』(1977) では日取りは明らかではないが、オランダから一度ドイツ、東欧を経て、引き返した折に再訪したように読める。
- 4) このあたりの事情については、前掲『近代建築の目撃者』及び堀口捨己「アウト氏の思い出」(『新建

築』昭和3年1月号)を参照。

- 5) オランダの新しい世代の活躍は1920年代末以降であり、J. ドイカーの〔オープン・エア小学校〕(1930)の〔ゾンネンストラールのサントリウム〕(1931)、ファン・デル・ブロート〔ファン・ネレ工場〕(1931)などが有名である。
また、ライトの影響としてはファン・ホッフ〔ヘニィ邸〕(1919)やJ. ウィルス〔ダール・エン・ベルク集合住宅〕(1922)が知られる。
- 6) 前掲『近代建築の目撃者』参照
- 7) 雑誌ウェンディンヘンの編集者の交代による内容の変化については、浦田寛史、足立裕司「雑誌 WENDINGEN にみるアムステルダム派の思想と建築」日本建築学会近畿支部、1997年
- 8) 前掲『近代建築の目撃者』p42で、リートフェルトについての関心、記憶が乏しいことが分かる。
- 9) この書に取り上げられている建物を辿ると、現代の評価と一致するところと違っているところが明らかになってくる。特に大きな関心の違いは、田園に散在する住宅であろう。集合住宅や公共建築が丁寧に維持されているのに比べると、こうした住宅はリスト化されていないものが多く、特定するのが困難をきわめた。アムステルダム派の活動の重要な両側面と考えられるが、都市的建築に評価が集中しているように思われる。
- 10) 1924年刊、「オランダの現代建築」の参考書として掲げられている。前後2巻からなる。
- 11) このあたりの経緯は、前掲「アウト氏の思出」に記されている。
- 12) 前掲「アウト氏の思出」
- 13) 同様の間違いは69図の「ラーレンの少年軍のクラブ」が地名(ラーレン)と建築家名(van Laren)の名前を混同したまま紹介されていることにもみられる。実際はラーレンではなく、ヒルベルスムに所在しており、これもオリジナルにした資料の間違いをそのまま引き写すことになっている。
- 14) 文中(p157)でも「露骨なアメリカのフランク・ロイド・ライト氏の影響を発見します」としている。
- 15) 前掲「アウト氏の思出」及び『近代建築の目撃者』
- 16) 堀口捨己『紫烟荘図集』洪洋社、昭和2年1月
- 17) 堀口捨己の「非都市的なもの」のもつ意味についての考察は、横山正「空間への眼差し」『建築文化』1996年8月号別冊『堀口捨己の「日本」』所収に詳しく展開されている。
- 18) 前掲「「空間への眼差し」p. 226
- 19) 例えば〔銀座の小住宅〕昭和11年、いわゆる鰐の寝床式の細長い敷地に建つ。天窓を利用して二階に採光を取っている。

図版説明

1. 堀口捨己著『現代オランダの建築』表紙、ラウベリクスの影響が感じられる
2. リートフェルト〔シュレーダー邸〕1924年に竣工しているが何故か堀口の関心は薄い
3. J. J. P. アウト〔カフェ・ド・ユニ〕

4. オランダ機能主義の代表例〔ファン・ネレ工場〕 ヒッチコックによってインターナショナル・スタイルの好例として世界に知られることになる
5. ウィルス〔ダール・エン・ベルク集合住宅〕 この建物を含め、何故かライト風の処理は避けられ、著作中には図版71の〔薬局エマ〕が掲載されているのみである
6. 堀口の撮影と思われる図版39〔Het Zwarde Huis〕
7. 図版39を同アングルで撮影(1996年) やや広角のレンズで十分にカバーできる。
8. 図版52〔ノルドウクの住家〕 内部 ドースブルクの設計によるこの内部のみを掲載
9. 〔ノルドウクの住家〕 外観 アウトの建築としては伝統的な処理がみられるため掲載されていない。
10. 〔ロッテルダムの市営住宅現場監督小屋〕 集合住宅に付随する仮設建築を敢えて取り上げていることに注意。幾何学的な処理は、やはりドイツで高く評価されていたラウベリクスの影響とみられる。
11. 〔ロッテルダムの市営住宅〕 全体写真(1977年撮影)
12. 〔Villa Allegonda〕(1917, 1927年増築) 改修が著しいが雰囲気は残っている
13. 〔ヒルベルシュムの共同浴場〕 堀口が言及している裏側のややライト風の処理
14. 〔ヒルベルシュムの小学校〕 この期の作としては比較的新鮮な処理がなされている。
15. 〔エイヘンハートの集合住宅〕 (図版30に対応) 現在の評価ではアムステルダム派の最高傑作とされているが、堀口はあえて別の作を評価する。
16. 〔同 集合住宅内の郵便局〕 図版32右と対照すると、堀口の訪問時とほとんど変わっていないことが分かる。
17. 〔アムステルダム南郊の集合住宅〕 堀口がデ・クラークの最高傑作と評価したもの一つ
18. 〔パーク・メールウク〕 配置図(出典; WED1918.8) 一部改修もあるが、雰囲気は今も残っている。
19. 〔パーク・メールウク〕 砂丘にも近いベルヘンの林のなかに今もひっそりと佇んでいる
20. 図版9〔掬林の片隅の家〕 現在は損なわれているが、建物と外構が一体で形成されており、後の堀口の作風との関連を想起させる。
21. 簡潔な外観の〔ラーレンの少年軍のクラブ〕¹³⁾ 堀口は伝統的な処理のなかにも規則性、秩序を重視している。
22. 建物と庭の池が一体的に処理された〔ヒーゲステーデ〕 何気ない建物であるが、堀口の眼差しを窺わせる建物の一つである。
23. 〔キア・オラ〕に似た住宅。この種の住宅はヒルベルシュムには多く見かけるが、微妙に違っていて、結局特定できなかった。
24. 最も表現的外観をもつ〔デ・ショウエンホーク〕 この種の表現的な建物にはあまり関心がないのだが、一例として掲げたようである。
25. 最も堂々とした田園住宅〔オーストヴェルヌの住家〕 広大な敷地に自然を享受しながら建っている。